

1930年代の大阪市立電気科学館プラネタリウムの活動の一考察

嘉 数 次 人 *

概 要

1937 年 3 月にオープンした大阪市立電気科学館は、日本初のプラネタリウム施設であり、さまざまな天文普及活動を行っていた。その活動については、同館が編集した『電気科学館二十年史』、『大阪市立電気科学館 50 年のあゆみ』などにまとめられており、多くが明らかにされている。一方で、詳細な事項については不明な部分が多いのも実態である。そこで本稿では、電気科学館のプラネタリウムで用いられていた愛称「星の劇場」の使用時期、電気科学館プラネタリウムの開館初年度の入場者、東亜天文協会(現在の東亜天文学会)と電気科学館との連携、という三点について、現存する史料から様子を探ってみる。

1. はじめに

1937 年 3 月にオープンした大阪市立電気科学館は、日本初のプラネタリウム施設であり、プラネタリウム 100 周年を迎えたいま、改めてその活動が注目されている。同館の活動については、『電気科学館二十年史』⁽¹⁾、『大阪市立電気科学館 50 年のあゆみ』⁽²⁾などにまとめられており、多くを知ることができる。一方で、詳細な事項については不明な部分が多いのも実情である。

そこで本稿では開館直後の 1930 年代に焦点を当て、当時の活動のいくつかについて、現存史料から探してみたい。

2. 電気科学館と東亜天文協会

2-1. 電気科学館と東亜天文協会の連携

1937 年に開館した電気科学館は、開館前のプラネタリウム導入段階から京都帝国大学教授の山本一清の協力を受けていたことはよく知られている。館の設立部署である大阪市電気局は、1935 年初めころにプラネタリウムの導入を局内で決定し、準備を進めた。しかし、電気局内には天文に詳しいスタッフはいなかった。そこで、協力を求めたのが、山本一清である。1935 年 2 月、電気局の小島康郎(のちの電気科学館館長)は、京都帝国大学花山天文台を訪問し、山本と面会して協力を要請した。申し出を快諾した山本は、それ以来、

プラネタリウムの導入をはじめ、プラネタリウムの運営などについて、専門家の立場から協力を行った。

その一環として、山本が主宰するアマチュア天文団体である「東亜天文協会」(1937 年当時の名称。現在の東亜天文学会)も電気科学館の事業に貢献した。

一例が 1937 年 11 月 10 日から 30 日まで開催された、「天文に関する展覧会」である。これは電気科学館主催、東亜天文協会大阪支部後援という形式で開催され、天文学に関する古今の資料 60 点以上を展示している(写真1)。主な展示物は、天体望遠鏡、六分儀などの天体観測機器、天球儀などの教材用模型、隕

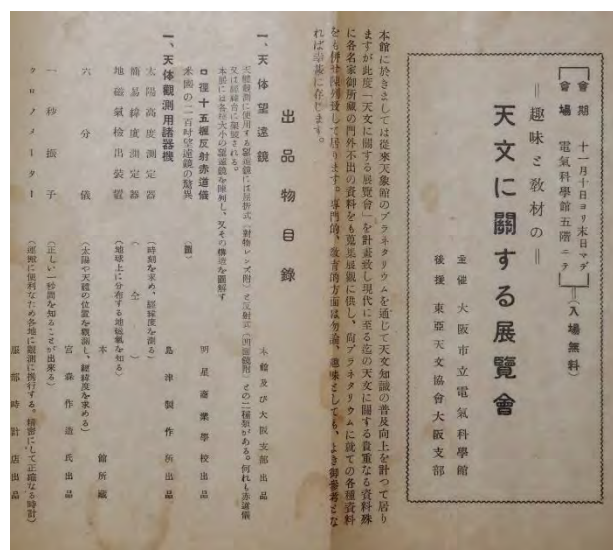


写真1. 「天文に関する展覧会」の出品目録

*大阪市立科学館学芸課

石などのほか、江戸期の渾天儀や天球儀、櫓時計、間重富旧蔵資料、などで、山本や大阪支部メンバーの所蔵品など貴重な資料も含まれており、充実した内容であった。

また同月には電気科学館屋上において、電気科学館と大阪支部の共催による太陽黒点観望会を開催しており、両者の連携はこの時期に本格化し始めていることが知られる。

2-2. 1938 年 2 月のプラネタリウム座談会

1938 年 2 月 5 日、電気科学館においてプラネタリウムに関する座談会が開催された。これは電気科学館と東亜天文協会の両者による、プラネタリウムの運営等に関する意見交換会であり、この時期に活発となった両者の連携の一環で実現したものである。

この会については、東亜天文協会の会誌『天界』1938 年 3 月号(第 18 巻、第 203 号)には、「プラネタリウム評議会」という名で開催されたことが報告されている。それによると「館側よりは館長始め電気局部長や天文部館員各位、本会側は会長始め京阪神の有志地方委員や篤志の女子会員等出席し、16 時の第 5 回公演と 17 時より 1 時間特殊演出によるプラネタリウムを見学し、18 時より地階食堂にて懇談評議会に移り有意義な両者の意見や感想や希望の交換を挙げて

21 時閉会」⁽³⁾とある。

一方、電気科学館側では、この会の記録を、「プラネタリウム座談会”記録”」⁽⁴⁾と名付けられた冊子にまとめている(写真 2)。では、ここで冊子の内容を見てみよう。

巻頭の要旨には、「本館創立一週年を迎ふるに當り、プラネタリウムを中心とする天象館の使命の完璧を期するため、一夜プラネタリウムに関する座談会を開催し、東亜天文協会の、會員中有志の方々を招待し、プラネタリウムに関する批評と意見を交換し、之を別紙に記録せり」⁽⁵⁾とあり、その趣旨が知られる。

出席者は、東亜天文協会側から宮森作造大阪支部長をはじめ、伊達英太郎、井本進、宇野良雄の各氏ら 19 名と、電気科学館側から川内電灯部長、小畑館長ら 9 名の合計 28 名である。議長は山本一清で、電気科学館側からの出席者扱いとなっている。

スケジュールは、午後 4 時からのプラネタリウム営業投影を観覧した後、5 時から 6 時までではプラネタリウムを使った投影演出に関する意見交換、午後 6 時から食堂において座談を行ったと記しており、『天界』の記述とも一致している。

館側が座談会に提示した話題としては、プラネタリウムの演出や解説に関する希望、観客誘致方法、宣伝方法、設備についての希望など、多岐にわたっている。その中で、協会会員から出た意見としては、

- ・天文解説書やパンフレットを作り、販売する
- ・一般の観覧者は、プラネタリウムに対して美しい星空を希望している。従って、1 回の投影の中に、テーマ解説で取り上げる話題が 2 つあるのは多すぎる。
- ・プラネタリウムの名称で、「天象館」の天象という文字は適当ではない。星という字を入れるのが良い。
- ・一日の投影の最終回の開始時刻を遅くしてほしい。
- ・学校団体の利用促進を図ってほしい。

などがあった。

それらがどの程度参考にされたかについては不明であるが、その中で実現したと思われるのが、「天象館」への愛称の設定である。この件については、以下のような発言があった。

プラネタリウムの名前が一般に記憶し難いと思ひます。第一に天象館の天象と云ふ文字が適切でないことで、天文と氣象とを重ねてあるのかと云ふ人があり、天氣を占ふと云ふことを天象と解釋すると思つてゐる人があります。それでこの名前の中へ星と云ふ字を入れるとよいと思ひます。⁽⁶⁾

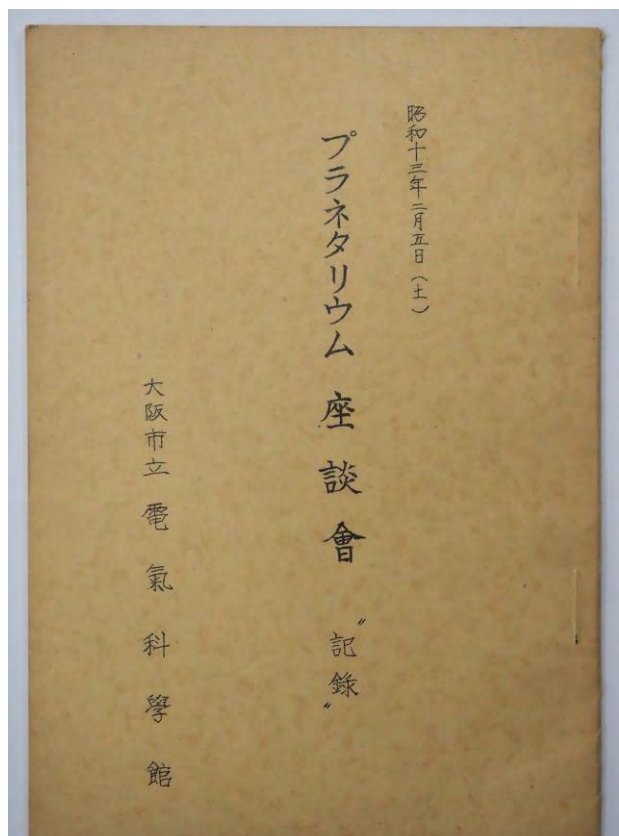


写真 2. 「プラネタリウム座談会”記録”」の表紙



写真3. 東亜天文学会大阪支部(大阪天文研究会名義)の銀河叢書第2輯『最新月面図 第1・2版附録』。右下に小さく「大阪市立電気科学館内」と書かれている。

この後、電気科学館では1939年頃からプラネタリウムに「星の劇場」という愛称を用いるようになっていたことから、本座談会での意見を受けて、館内で検討が行われた可能性があると思像できる。

また、プラネタリウム観覧者に配布するプログラム紹介リーフレットは1938年3月より発行が始まったほか、解説員の原口氏雄が『天文常識 星の話』という天文解説書を執筆し、出版している。これらも、座談会の意見が反映されている可能性がある。

2-3. 東亜天文協会大阪支部の事務局設置

その他にも、電気科学館と東亜天文協会との連携の例としては、1938年に大阪支部の事務局が電気科学館内に置かれることになったことが挙げられる。この時期、大阪にあったアマチュア天文団体の「大阪天文研究会」(単に天文研究会と称することもある)が、東亜天文協会の大阪支部を兼ねているが、同支部が発行していた冊子を見ると、「大阪市立電気科学館内」という文字が見られるのである(写真3)。

事務局の詳細や、電気科学館の関与の程度は不明であるが、電気科学館のプラネタリウムスタッフとして在籍していた高城武夫は東亜天文協会の会員であり、花山天文台で天文学を学んでいたから、支部の窓口的な役割を担ったのかもしれない。

以上のように、1938年頃に東亜天文協会との連携関係が築かれたことが窺える。

3. プラネタリウムの愛称「星の劇場」について

戦前の一時期、電気科学館ではプラネタリウムに「星の劇場」という愛称を付け、広報に用いていた。この愛称は、いつ頃使われていたのだろうか。今に伝わる電気科学館資料から考えてみよう。

筆者の管見する限り、館内資料で「星の劇場」の名が初めて登場するのは、1939年3月のことである。開館以来、電気科学館の観覧者へのサービスとして設置していた記念スタンプが磨滅してきたことから、新しいデザインのスタンプを製作する計画があり、この時のスタンプ図案に「星の劇場 プラネタリウム」という文字が見られるのである。従って、このスタンプが製作され、館内に設置されたのは同年4月頃と推測することができる。

一方、来館者向けに毎月発行・配布していたプラネタリウムのプログラム紹介リーフレットにおいては、1939年7月号の表紙に「7月の星の劇場」(写真4)という文字が見られるのが初出である。その後、1940年4月号までは同様の表紙が続いていたが、同年5月号からは「5月のプラネタリウム」というタイトルに戻っており、「星の劇場」の愛称は見開き本文ページに一か所にだけ出てくるのみとなる。しかし、その記述も同年11月号以

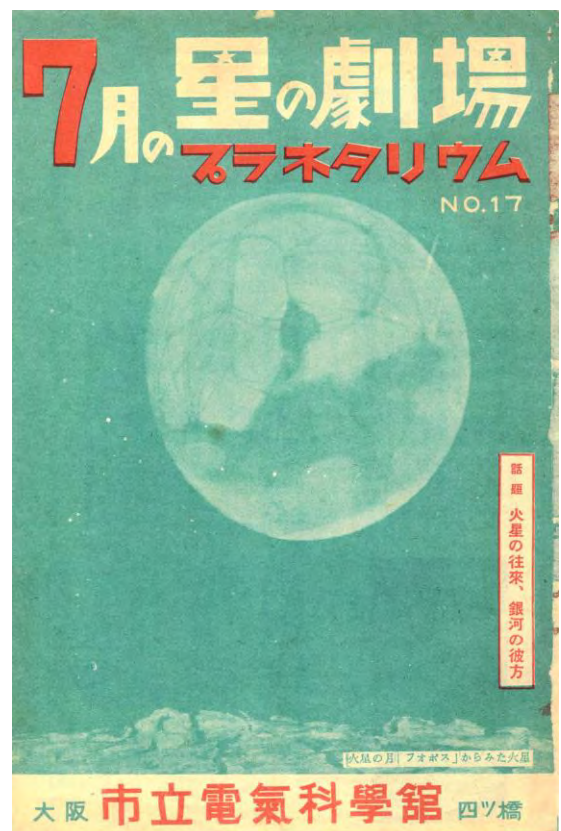


写真4. 1939年7月のプラネタリウムリーフレット

降は時折散見される程度になり、1943(昭和 18)年以降は見られない。

また、プラネタリウムの宣伝ポスターにおいては、管見に入る限り 1942 年の半ばころまでは「星の劇場」という名が確認できる。

その後、この愛称は戦後のパンフレット中の紹介文などの中で時折使われることがあったが、広報において大きくアピールされる事例は見られない。

従って、電気科学館が「星の劇場」という愛称を前面に押し出した広報をおこなっていたのは、1939 年春頃から 1942 年頃までの 3 年間程度という短い期間であったようである。

ところで、「星の劇場」という名は、作家の織田作之助が著した小品のタイトルとして用いたことでも知られている。戦地にいる友人から届いた手紙に、現地で星空を見ていると電気科学館のプラネタリウムを思い出したと書かれていたことから、織田自身が電気科学館を訪れてプラネタリウムを観覧した時の体験を書き留めたエッセイ的な作品である。

この作品の具体的な執筆年代や、織田がプラネタリウムを観覧した時期は残念ながらわかっていない。推測するに、上述のように電気科学館で「星の劇場」という愛称が積極的に使われていたのは 1939 年から 1942 年頃であることから、この時期に観覧した可能性がある。ちなみに、本作品中に「天井に映された太陽が西へ傾き、落ちると、大阪の夜の空が浮び出て来る。降るような星空だ。月が出て動く。星もいつか動く。と見る間に南極の空が浮びあがって、星の世界一周が始まったのだ。」⁽⁷⁾という表現が見られる。つまり、織田は南極の空を紹介するプログラムを見たことが知られる。そこで、1939 年から 1942 年の期間において、南極の星空を紹介したプログラムを見ると、以下の 5 件があった。

- ・1939 年 5 月:「南極の夜空、北極の一年」
- ・1939 年 12 月:「珍しい南極海の星空」
- ・1940 年 2 月:「皇紀元年建国の星 ー南極海の星と夜」
- ・1941 年 2 月:「南国の空と南極星」
- ・1941 年 12 月:「南北世界一周」

織田はこのいずれかの投影を見たのではなかろうか。

4. 開館直後のプラネタリウム入場者数について

1937 年 3 月にオープンした電気科学館であるが、プラネタリウムも含め、人気の施設であったという話を聞く。では、開館直後において、プラネタリウムの観覧者数はどの程度であったか。電気科学館の発行した『電気科学館二十年史』(1957 年)、『大阪市立電気科学館 50 年のあゆみ』(1987 年)は共に、昭和 12 年度の年間観覧者数は、108,548 人としている⁽⁸⁾。

一方、電気科学館の昭和 13 年度決議書綴中にある、「昭和十二年度電気科学館入場統計書」によると、昭和 12 年度(1937 年 4 月～1938 年 3 月)の入場者数は、169,777 人となっている。なぜ両者の数字が異なっているのかは不明であるが、後者の統計書は館内で正式に回覧されている事から、こちらの数字もある程度の根拠があるようにも思われる。

また統計書によると、1937 年度の開館日数は 337 日とある。従って、年間入場者数 169,777 人と考え併せて、一日の平均観覧者数を計算するとは 503.8 人である。ここで、電気科学館のプラネタリウムを定員 300 人、1 日の投影回数は 5 回とすると、1 日の最大収容人数は 1,500 人となるから、実績値での年間平均座席占有率は約 34%となる。つまり電気科学館開館直後において、プラネタリムは連日満員で盛況というわけではなかったことが推測できるのである。

5. おわりに

以上、1930 年代を中心とした電気科学館の活動に関する 3 点の事柄について管見した。電気科学館の活動については、閉館から三十数年経っていることもあり、当時の様子を知ることが難しい状況になってきている。一方で、近年はプラネタリウム 100 周年の関係で、日本初のプラネタリウム施設である電気科学館に関する情報の需要が高まってきている。しかし、情報源として活用する『電気科学館二十年史』などにあるちよつとした文章や表現についても、その根拠や出典が忘れられてきているのである。そこで、当時の資料をたどりながら、明らかにしていく必要があるが、まだ不明な点は多く、今後の調査が待たれるところである。

註

- 1: 大阪市立電気科学館編集・発行。1957 年 3 月。
- 2: 大阪市立電気科学館編集・発行。1987 年 3 月。
- 3: 東亜天文協会編『天界』1938 年 3 月号(第 18 巻、第 203 号) 160 ページ。
- 4: 電気科学館編集・発行。1938 年。大阪市立科学館所蔵、資料番号: 1994-1156。
- 5: 前掲 4。1 ページ。
- 6: 前掲 4。18 ページ。
- 7: 織田作之助「星の劇場」。本作品はインターネット図書館「青空文庫」に全文が掲載されている。
https://www.aozora.gr.jp/cards/000040/files/47837_36047.html (2023 年 7 月 15 日閲覧)
- 8: 『電気科学館二十年史』199 ページ。『大阪市立電気科学館 50 年のあゆみ』105 ページ。